# はじめに

社会言語学では、実際の社会で進行中のことばの変化が、どのように言語構造と社会構造に埋め込まれているか、つまり（1）ことばと社会要因の関わり、（2）なぜそうした変化が起こるのかという原因とメカニズム、を解き明かすことを目的としています。歴史的に、言語学の分析では音素・音韻・形態素・統語論・意味論というように言語をいくつかのレベルに分けて研究してきました。また、言語学には、社会言語学のみならず、応用言語学・コーパス言語学・心理言語学・対照言語学・認知言語学・歴史言語学など、「〇〇言語学」という修飾語付きの言語学の分野で特定の要素や観点から言葉を分析してきました。たとえば、社会言語学は「社会」という修飾語が付いていることから、心理言語学などとともに言語学の下位分野だと捉えることは可能でしょう。にもかかわらず、それぞれが言語学の分野で確固たる独自の立場を貫いてきた研究分野でもあるのです。そして、本書が目指しているのは「言語とは何なのか、社会と言語、人間と言語はどのように関わっているのか」という問題意識です。つまり、「社会志向の言語研究（socially oriented linguistics）」なのです。

拙著『言語と文化：さまざまな言葉のバリエーションを言語学の視点から読み解く』の続編としても、本書から『言語と文化』に読み進むための入門書としても、本書を読むことは可能です。そうした意味で、現代の日本文化を代表するポップカルチャーやスポーツなど文化に関わる親しみやすい具体例を数多く収録し、そこから文化と言語のつながりを探るという『言語と文化』と同じ方向性を維持してあります。また、新聞記事で使用されている言語表現のみならず、テレビのバラエティー番組やドラマなどで使用されてい



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

る言葉を収録するという方向性は「社会志向の言語学」のひとつの様相と言ってもいいでしょう。もちろん、読者が本書を「エンターテインメント言語学」と感じても不思議ではありません。しかし、筆者の本意は必ずしも大衆芸能の分析ではなく、ポップカルチャーやスポーツなどの用例を引用することで、読者に言語の諸様相に親近感をもってもらい、日常生活で感じる日本語の変化に関心を持ってもらいたいという願いです。そして、それが「社会志向の言語学」の神髄でもあるのです。

前述したように、言語学では音素・音韻論、形態論・形態素論、統語論、意味論、語用論といった区分に従って言語の記述を試みてきました。しかし、本書では音素・音韻論から始まる配列は意図的に避けることにしました。もちろん、これらのレベルでの記述は重要ですが、談話という文を超えたレベルでの言語現象が、近年では言語研究で重要な地位を占め、中心的役割を果たすようになって来ています。また、認知言語学へのパラダイム転換、つまり認知的アプローチも近年、その重要性が認められています。認知的・談話的・教育的観点から言語の諸現象を考察するという意図を念頭に本書を読んでいただければ、言葉の理解がよりいっそう深まるでしょう。

言語学の現在の立ち位置ばかりでなく、言語学発展の歴史的認識も大切です。1960 年代後半から 1970 年代前半の言語研究は、理論言語学者ノーム・チョムスキー（Noam Chomsky）の生成理論・普遍文法理論に影響を受け、言語にかかわらず普遍的に存在する「言語能力（linguistic competence）」重視の時代でした。チョムスキーが 1965 年に出版した *Aspects of the Theory of Syntax* に触発されて心理言語学は発展しましたし、第二言語習得研究といった他の分野もチョムスキー革命の多大な恩恵を受けました。社会言語学でもそうした恩恵と発展は認められましたが、チョムスキーへの批判という形で出現し、その先陣をきったのがデル・ハイムズ（Dell Hymes）でした。チョムスキーは、文法的に正しい意味のある文章・発話を生成・理解できる「言語能力」と実際の「言語運用（linguistic performance）」を区別することで、言語能力が何であるかを追求しました。一方、ハイムズは「言語能力」と「伝達（コミュニケーション）能力（communicative competence）」を区別する必要性を主張し、

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

実際のコミュニケーションをより効果的に遂行する能力の重要性を説いたのです（Hymes 1974）。「伝達能力」は現実の言語社会において、現実の話者が具体的な場面に遭遇したときに実際に使用する言葉づかいで、文法規則だけでなく使用規則、つまりコンテクスト（context：文脈）対応能力です。

本書では、コンテクスト理解の重要性を幾度となく指摘します。ハイムズはアメリカ先住民族の伝承説話の一連の分析を通して「言葉の民族誌（ethnographies of speaking and communication）」の枠組み（フレームワーク）を提唱しましたが、「伝達能力」も「言葉の民族誌」もコンテクストと切っても切れないものです。たとえば、ウィリアム・ラボフ（William Labov）は談話構造と談話の変異形に注目しながら研究を行った先駆者として知られています。本書の第 2 章では、ラボフが提唱する語りの構成要素と語りの分析手法を取り上げますが、それはラボフの機能分析における語りの要素がコンテクストの影響を受けない自律的、自己完結型の構成単位で普遍性を持っているからです。普遍モデルの対極が文化固有モデルですが、ハイムズは、行／連分析（stanza and verse analysis）を用いることで、北米原住民の口頭伝誦に談話単位としての階層性の存在を主張しています（Hymes 1981, 1982, 1985, 1990）。行／連分析は、特定の文化を理解するための、つまり、語りは「伝達能力」であり、文化的に共有されているコンテクストを理解するためのモデルなのです。

ハイムズによってその枠組みが示されたコンテクストをどのようにとらえるかということは談話構造、とりわけ語りでは大命題です。筆者も過去に Labov の普遍モデルと行／連分析を組み合わせて独り語りを、さらにインタラクション・モデルを導入することで語り手主導の独り語りではない「会話の中の存在としての語り」の構造理解の重要性、そして語りの構造がコンテクストから独立したものではないことを強調してきました（Minami 2002）。しかし、本書では、行／連分析ではなく、接続表現や時制、態という側面からコンテクストを眺めることにしました。そうすることで、文化に固有の語りの構造が見えるわけではありません。しかし、語りの普遍性に関わっている一貫性ばかりでなく、語りの固有性の表象としての結束性も捉えることが可能だと考えました。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

また、本書では実際の調査や統計分析を含めることで、大学生、大学院生の方々にも言語調査が垣間見てもらえるように工夫しました。とりわけ、第4章で紹介する言語調査は、大阪府岸和田市出身でサンフランシスコ州立大学大学院に在籍していたAlisa Frances Mahoneyさんと現在も岸和田市在住のご両親・ご家族からの格段のご理解を賜り献身的なデータ収集協力によって可能になったものです。研究調査データ収集後の初期分析段階（2011年6月）では、故陣内正敬先生に貴重な助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。また、中泉方言話者であった亡父、南友雄、伯母、南悦子、筆者の従姉妹・従兄弟を始め、筆者が幼少から小・中学生の時代に岸和田ことば（中泉方言）を身近に観察する機会を与えてくださった当時の同級生、岸和田市でお世話になった方々にも感謝の意を表します。また、筆者が京都大学経済学部の学部生だったときの指導教官、山田浩之先生のご厚情にも感謝します。山田先生には都市文化・地域経済研究会に複数回、お呼びいただきましたし、研究会事務局長で岸和田市での本調査発表の機会をご準備いただいた井上馨先生にも感謝申し上げます。

本書は筆者の周囲の人々の深い理解と温かい激励のたまものです。同僚の高坂聖子先生、湯川景子先生からは、どのような事象や説明が理解しにくいのか、具体的な意見を伺いました。本書を世に出すにあたり、くろしお出版のスタッフの方々、とくに10年以上にわたり筆者のアイデアに熱心に耳を傾け、励ましてくださった編集担当の池上達昭さんには心からの感謝と御礼を申し上げます。筆者が大学院留学のためアメリカ合衆国に移り住んでかれこれ30年の年月が経過しました。その間、日本から書籍・雑誌を送り続けてくれた今は亡き2人の父、南友雄と岡持勇治郎、そしてその後を引き継いで資料を送り続けてくれた南桂子、岡持義人・邦子に感謝の意を表します。そして最後に、本書を妻、ひとみと3人の子どもたち、智子、宣孝、香里に捧げます。

南　雅彦

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 目　次

第 1 章　言葉の分析を楽しもう ..... 1

1　言葉の分析は楽しい ..... 1

2　語彙の創出 ..... 4

2.1　「リバー」「ライバル」「リビエラ」おまけに「到着」ってどんな関係？ ..... 4

2.2　ラテン語の影響 ..... 7

3　逆形成と異分析 ..... 8

3.1　ダジャレ、流行語と新語 ..... 8

3.2　引き算の逆形成と足し算の異分析 ..... 9

3.3　異分析：敬意表現 ..... 10

3.4　異分析：名詞 ..... 11

3.5　認知の普遍性 ..... 12

4　形態素分類：自由形態素と機能語 ..... 14

4.1　「ググる」だけれど「ツイートする」？ ..... 14

4.2　動詞→名詞化→再動詞化 ..... 15

5　機能語 ..... 16

5.1　接続詞 ..... 16

6　接続表現 ..... 17

6.1　自立語化している「なので」「ので」 ..... 17

6.2　接続表現：「なのに」「だのに」「のに」 ..... 21

6.3　類似の成立過程をたどった接続表現 ..... 22

6.4　脚本に見る接続表現 ..... 25

6.5　「なのに」と「だのに」再考：ポライトネスの視点から ..... 27

6.6　本書の方向性 ..... 28



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章 言葉はどのように使われるのか―談話の構造を考える― ..... 31

1 非日本語母語話者の語り ..... 31
1.1 スキーマと視点 ..... 35
1.2 談話とは何か：談話の定義 ..... 37
1.3 談話における言語普遍性と言語固有性 ..... 41
1.4 談話構造と談話機能 ..... 42
1.5 文化内コミュニケーション ..... 43
1.6 社会化・文化化の結果としてのコミュニケーション ..... 44
1.7 異文化コミュニケーションの困難さ ..... 45
1.8 語り（ナラティヴ）の定義 ..... 46
1.9 語り（ナラティヴ）のジャンル ..... 47
1.10 談話・語りの一貫性と結束性 ..... 48
2 一貫性（coherence） ..... 49
2.1 Labov の内容（機能）分析 ..... 49
2.2 ラボフの内容（機能）分析の絵画ストーリーへの適用 ..... 52
3 結束性（cohesion） ..... 55
3.1 語りのための装置：時制と態 ..... 55
3.2 時制と態の導入：小説から ..... 56
4 結束性（cohesion）：時制現象をどう捉えるか ..... 58
4.1 日英語の時制 ..... 58
4.2 時制：日本語学習者用の教科書から心理的距離感を探る ..... 62
4.3 丁寧体（デス・マス体）と普通体（ダ体）の使い分け：
体験談から心理的距離感を探る ..... 65
4.4 ナラティヴ現在：小説に認められる時制現象（日英翻訳） ..... 68
5 結束性（cohesion）：能動態・受動態と視点 ..... 72
5.1 日本語の受動態：結束性の問題 ..... 72
5.2 主語省略と視点の問題：日英バイリンガル児童の作話例 ..... 74
5.3 主語省略と視点の問題：成人日本語学習者の作話例 ..... 76
5.4 小説に認められる態の使用（日英翻訳） ..... 79
6 まとめ ..... 81

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章　言語変化はどのように進むのか―地域方言と若者言葉①―……83
1　地域方言……83
1.1　地域的なバリエーション：役割語、方言コスプレ、反照代名詞……84
1.2　地域方言と有標性……86
1.3　方言教育の必要性……87
1.4　「ソーシャル・キャピタル」とは何か……88
1.5　「出身県」は当たるのか？……91
1.6　「あれへん」か「あらへん」か……92
2　方言周圏論……94
2.1　「アホ」か「バカ」か……94
2.2　蝸牛考（かぎゅうこう）……95
2.3　有声鼻音化子音と有声両唇破裂音の相似性……98
3　地域方言の変異性……99
3.1　大阪諸方言を考える……99
3.2　「ケ」「シ」「チャル」などに認められる中泉方言の特徴：岸和田ことば……100
3.3　「せ」の仮名はシェ・ジェの音を表していた！：共通語のほうが変化……103
4　言語・語彙変化の要因……104
4.1　有声音 vs. 無声音……104
4.2　異音……105
4.3　相補分布……106
4.4　音声記述か音韻表示か……106
4.5　単純化の方向：順行同化・逆行同化・混交形……108
4.6　単純化の方向：混交形（標準語＋方言）……112
4.7　新方言と潜在的威信……114
4.8　若者言葉：「～クナル」……116
4.9　若者言葉と地域方言の関わり：「～クナイ」……118
5　地域方言の変化の方向……120
5.1　『あまちゃん』とラボフの方言調査に共通しているのは？……120
5.2　相手に合わせてものを言う：
スピーチ・アコモデーション（発話適応）理論……125

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

5.3 マック vs. マクド ..... 130
5.4 マックはハンバーガー？それともコンピュータ？：同音衝突 ..... 132
6 大阪方言研究の展開 ..... 133

第4章 実際に調査してみてわかること―地域方言と若者言葉②― ..... 135

1 方言否定形の調査 ..... 135
1.1 調査の概要 ..... 135
1.2 調査目的 ..... 142
1.3 否定辞の変異形 ..... 143
1.4 得られた結果 ..... 149
1.5 脱落形式・脱落＋カッタ：省力化・単純化の認知的可能性 ..... 151
1.6 イ段順行同化：音韻環境という言語内要因からの単純化 ..... 153
1.7 エ段逆行同化：本来の大阪方言の将来 ..... 154
1.8 混交形：言語外要因からの単純化 ..... 156
1.9 過去形の否定表現：ナンダ系の現状と将来 ..... 158
1.10 共通語形：スピーチスタイルの変容 ..... 160
2 研究の展望 ..... 161
2.1 『方言周圏論』再考 ..... 161
2.2 中泉方言再考：疑問の終助詞「ケ」 ..... 162
2.3 中泉方言再考：文末詞「シ」 ..... 163
2.4 中泉方言再考：「～てやる」の音便形「チャル」 ..... 165
2.5 若者言葉再考：「～クナル」「～クナイ」と方言との関わり ..... 167
2.6 まとめ ..... 168

第5章 言語はなぜ変化するのか ..... 171

1 カテゴリー化：階層分類 ..... 171
1.1 階層分類（カテゴリー化） ..... 173
1.2 プロトタイプモデル（prototype model） ..... 177
1.3 イメージ・スキーマ ..... 178

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

1.4　カテゴリー境界：品詞の曖昧さ（形容動詞）……179
1.5　カテゴリー境界：品詞の曖昧さ（オノマトペ）……181
1.6　動詞の歴史的変化：存在表現……181
2　言語変化……182
2.1　記述文法：動詞の活用から「ラ抜き」の規則性を考える……183
2.2　可能表現の作り方……186
2.3　規範文法……188
2.4　社会的要因と言語的要因……191
3　認知的負担の軽減……194
3.1　新語動詞の特徴：類推拡張……195
3.2　方言の造語……198
3.3　日本語学習者の造語……199
3.4　「ラ抜き」再考：論理的整合性なのか、類推的拡張・単純化なのか……199
4　「レ足す」言葉……201
4.1　歴史的表現「行かれる」……201
4.2　「レ足す」とは何か……202
4.3　若者言葉と新方言：サ入れ言葉……203
4.4　「レ足す」「ラ入れ」を方言から考える……205
4.5　「レ足す」「ラ入れ」を日本語学習者の発話から考える……206
5　可能表現再考：「レ足す」を含めた「ラ抜き」再々考……208
5.1　プロトタイプと異分析……208
5.2　方言を考えてみたら……208
5.3　単純な体系構築としてのラ行五段化……210
5.4　進行中のラ行五段化……212
5.5　類推変化……213
5.6　概観と研究の方向性……216

参考文献……220
索引……227

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 第 1 章

# 言葉の分析を楽しもう

## 1　言葉の分析は楽しい

次の発話はウェブからの実例ですが、どのように解釈すればいいのでしょうか。ちなみに、グルクンはインド洋・西太平洋の熱帯域に分布する海水魚です。

(1)　北海道では熊と同じくらい鮭食べるけど、沖縄もジンベエザメと同じくらいグルクン食べる。

前半は「北海道民は熊肉と同じくらい鮭を頻繁に食べる」、後半は「沖縄県民もジンベエザメを食べるのと同じくらいの頻度でグルクンを食べる」という意味なのでしょうか。たとえば、「大分県民は牛と同じくらい鶏食べる」なら「大分県民は牛肉と同じくらい鶏肉を食べる」と解釈するでしょう。熊肉は昔から食用とされてきたので、北海道地方では熊も鮭も同じくらい食べられていると解釈することは可能です。しかし、熊肉は大量には出回っていないはずなので、どうも不思議な感じがします。しかも、ジンベエザメは、通常は食用とされないでしょうから、意味がよくわかりません。ここで北海道土産の代表である鮭をくわえた熊の置物を思い出してみると、「北海道では、熊が鮭を食べているのと同じくらい道民は鮭を頻繁に食べる」という意



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 第 2 章

# 言葉はどのように使われるのか
# ―談話の構造を考える―
ディスコース

## 1　非日本語母語話者の語り

私たちは日常生活の中でさまざまな語りに出会います。語りは、小説やテレビなどの虚構の世界ばかりではありません。私たち自身が、実際に日常生活の中で「物語る」という行為を頻繁に行っています。昨日たまたま経験したこと、ずっと以前に遭遇した経験で今も心に深く残っていることなど、さまざまな体験・経験を誰かに語りたいものです。こうした欲求は、第二言語もしくは外国語学習者が目標言語で話す場合も同様でしょう。でも、伝えたい情報を相手に正確に、そして的確に伝えるという作業はときとしてきわめて難しいものですし、外国語や第二言語では、その困難さはなおさらのことです。これは伝える道具としての言語能力が、その目標を達成するには十分ではないという現実に直面してしまうからでしょう。

コミュニケーション（communication）がラテン語の *communis* に由来し「共有」を意味していることは第 1 章で述べました。言語能力が限られている中で、コミュニケーションを達成し、聞き手・読み手との間にコンテクスト（context：文脈）をどのように確立するのかという問題はとりわけ難しい課題ですが、語る作業となると至難の業となるかもしれません。第二言語・外国語学習者がどのような談話構造を用いてコミュニケーションを達成し、自らの過去の体験を物語るのでしょう。ここでは北米の大学で日本語クラスを



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 第3章

# 言語変化はどのように進むのか
# ―地域方言と若者言葉①―

## 1　地域方言

大阪では、古くからさまざまなダジャレことばが発達し蔓延しています。中には、現在でも通用するものがいくつかあります。ここでは、部長、古参ですがヒラ社員の山田さん、そして新入社員の鈴木さんの三人が、鈴木さんの歓迎をかねて金曜日に飲み屋にいる場面を紹介します。ここで三人が話していることが理解できるでしょうか。

部長：鈴木君、今週は新しいことばっかりで、えらかったやろ。今日はしっかり飲み。何でも好きなもん食べり。

鈴木：ほな、遠慮なく。

部長：おお、お前、ええ飲みっぷりやんけ。その調子で仕事もがんばりや。そやけど、くれぐれも言うとくけど、ここにいてる山田みたいになったらあかんで。気いつけや。

山田：部長、それ、ほんまに、むかつきますわ。あれ？部長、いっこも飲んでないですやん。なんぼ部長のおごりやゆうたかて、部長が飲まんと、おれら飲みにくいですわ。

部長：そない言うて、山田、わしを酔わすつもりやな。自分、勝手に好きなだけ飲んだらええがな。



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 第4章

# 実際に調査してみてわかること
# ―地域方言と若者言葉②―

## 1　方言否定形の調査

### 1.1　調査の概要

本章では、大阪府南西部の泉州地域の高校2校に在学する高校生（若年層）を対象とした言語使用のアンケート調査結果の一部を報告します。まず、打消形式「ヘン」「ヒン」「ン」などの否定辞に着目しながら、(1) 同化（assimilation）、(2) 標準語と方言の混交形、(3) 脱落形式など変異形の併存状況を調査し、その背後にある合理化（単純化・省力化）の方向性を概観します。また、標準語と方言の混交形が今後、拡散・浸透していく可能性の有無、そうした混交形に認められる合理化の方向性、混交形そしてさらには共通語形が今後、拡散・浸透していく可能性の有無を探ります。否定形に着目したのは、関西方言の否定辞「ヘン」が、これまで述べてきた「他集団との差別化機能」のマーカーとして残っていく可能性が大きいからです（南 2013）。

次に、「ケ」「シ」「チャル」など中泉方言の使用、「～くなる」「～くない」などの若者言葉の使用に関しても報告しますが、大阪府在住の若年層の言語使用の様相を探ることが本調査の主たる目的です。とりわけ、共通語（標準語）の影響からなる混交形、そして（混交形という変異のさらに先にあるものとしての）共通語形がどの程度、浸透・拡散しているかを検証することです。



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

# 第5章

# 言語はなぜ変化するのか
# ―プロトタイプと可能表現―

## 1　カテゴリー化：階層分類

おとぎ話『桃太郎』は、桃から生まれた男の子がお婆さんからきび団子をもらって、鬼ヶ島まで鬼を退治しに行く物語ですが、何か違和感を覚えたことはありませんか。

> むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。ある日、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。
> おばあさんが川で洗濯をしていると、ドンブラコ、ドンブラコと大きな桃が流れてきました。おばあさんは大きな桃を家に持ち帰りました。おじいさんが包丁で桃を切ろうとしたら、桃がぱっくりふたつに割れて、なんと中から元気な男の赤ちゃんがとび出してきました。おじいさんとおばあさんは、桃から生まれた男の子を桃太郎と名づけました。桃太郎はスクスク育って、やがて強い男の子になりました。
>
> そのころ、鬼ヶ島の鬼が都の人々を苦しめていました。桃太郎は、時間をかけてじっくり考えました。そして、ある日、桃太郎はおじいさんと



BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers